

酔っ払いの戯れ——Mattavijāsa 和訳——

堀 田 和 義

はじめに⁽¹⁾

本稿は、パッラヴァ朝のシンハヴィシユヌヴァアルマン (Sinhaviṣṇuvarman) 王の息子であるマヘーンドラ・ヴィクラマヴァアルマン (Mahendravarmanavarmān) 王の戯曲『酔っ払いの戯れ』(Mattavijāsa) の和訳である。

マヘーンドラ・ヴィクラマヴァアルマンは、有名なハルシャ (Harṣa) 王とほぼ同時代の人物であるため、この作品の年代も七世紀前半頃と考えられている。作品は原則として一幕から成るプラハサナ (prahasana) と呼ばれる形式の笑劇である。⁽²⁾ インド演劇に関する綱要書 *Dasarupaka* では、プラハサナは十種の正劇のうちの一つに含められ、⁽³⁾ 異教徒やバラモンらを主な登場人物としてそれぞれに相応しい衣装や言語を用い、滑稽な台詞に満ちており、その主要な情調は「滑稽 (hasya)」とされる。⁽⁴⁾

パッラヴァ朝の首都カーンチー (現カーンチープラム) を舞台とし、人間の頭蓋骨を鉢用の鉢として携帯するカーパーリカ⁽⁵⁾と呼ばれるシヴァ教の一派の修行僧サティヤソーマと、その恋人のデーヴァソーマーとが酒屋で鉢を紛失したところから物語が展開する。

彼らは鉢に焼肉が入っていたことから、盗んだのは犬か仏教僧だと考え、偶然近くを通りかかった仏教僧ナーガ

セーナに疑いをかけて、誹いが起こる。途中、シヴァ教の別一派であるパーシユパタ（獸主派⁶）の修行僧に裁決を頼むが、結局、鉢を持っていったのは犬であったことが判明し、その犬から鉢を取り上げていた狂人からカパーリンの手に戻って、一件落着となる。

冒頭の祈禱 (nandi) の直後に劇が始まる点や序幕が Prastāvāna ではなく Sthāpanā と呼ばれる点をはじめ、作品の多くの特徴から、バーサ (Bhāsa) の影響が色濃く見られると言われる。作品中の言語としては、カパーリンとパーシユパタはサンスクリット語を、デーヴァソーマー、仏教僧、狂人はブラスクリット語を話す（デーヴァソーマーと仏教僧はシユウラセーナ語⁷、狂人はマガダ語⁸）。

作品中の詩節の韻律は九種類のものが用いられており、Soka が五詩節、Sardulavikridita が五詩節、Indravajra が三詩節、Arya が三詩節、Vanisastha が二詩節、Vasantatīlaka が二詩節、Rucira、Malini、Sragdhara がそれぞれ一詩節ずつとなっている。

和訳に際しては、底本として、*Mattavilāsa Prahasana*. Ed. N. P. Umi. Trivandrum: College Book House, 1974 を使した。また、四種類の英訳 (Barnett 1930, Lockwood et al. 1994, Lorenzen 2000, Umi 1974) および二種類のヒンディー語訳 (Kapladevagirī 1966, Majumadara 1988) を参照したが、とりわけ Barnett 1930, Kapladevagirī 1966, Majumadara 1988 からは得るところが多かった。戯曲というテキストの性格上、誤訳であるのか意図的に逐語訳を避けているのかの判断は困難であるため、細かい相違点は省略し、解釈が大きく異なる点に限って注記した。

凡例

一、epithet などは、文脈の理解を妨げないような名前に変えて訳し、注に原語とその意味を記した。

二、必要に応じて、原文にない主語や接続詞その他の言葉を補った箇所があるが、読みやすさを考慮して、インド学

で多用される「」の使用は最小限にとどめた。

三、詩節の原文は韻文であるが、散文で訳した。また、二字下げにして前後を一行空け、末尾に作品全体での通し番号を付した。

登場人物（男女別・登場順）

座長

カパーリン サティヤソーマ。シヴァ教の一派であるカーパーリカに属する修行僧。

仏教僧 ナーガセーナ。

パーシユパタ バブルカルパ。別名シューラナンディン。シヴァ教の別の一派である獣主派に属する修行僧。

狂人

女優 座長の年長の妻。

デーヴァソーマー サティヤソーマの恋人。

和訳

祈禱の後、座長登場。

座長――

言葉、衣装、身体、所作、性質によってもたらされる区別に依拠し、感情移入することによって様々な情趣を備え、三界の営みから成る踊りを〔踊り〕、自らが観客でもある。その認識の偉大さが妨げられることのない、そ

のような神々しいシヴァが、世界という器⁽⁸⁾を満たす名声をあなた方にもたらしめますように。(一)

おお、見つけたぞ。若い妻のせいで機嫌を損ねている年長の妻を宥める良い手段を。というのも、今日とうとう観衆に上演するよう命じられたんだからな。どれ、ちよつとあの女の近くに行つてみるか。(舞台裏の方を見渡し) おい、ちよつと、こちらへ来なさい。

女優、登場。

女優 (怒つて) あなた、とうとう青春の美質を備えた酔っ払いの戯れ⁽⁹⁾の笑劇を上演しに来たの？

座長 お前の言う通りだ。

女優 それならば、仲良くすべき女と演じなさいよ。

座長 お前と演じようと思うんだが⁽¹⁰⁾。

女優 あの女に命令されたの？

座長 そうなんだよ。しかも、それに出来れば、お前もとても気に入られるんだ。

女優 それは、あなただけに関わりのあることだわ。

座長 お前、関係ないことがあるものか。⁽¹¹⁾ お前の演技に満足すれば、観衆がご鼻屑⁽¹²⁾にしてくれるだろうよ。

女優 (喜んで) そうね。高貴な人たちのご鼻屑を得たということね？

座長 もちろん。得たも同然だよ。

女優 もしそうならば、あなたにどんな良い知らせをお返ししようかしら？

座長 良い知らせを繰り返す必要などない。ご覧なさい——

産毛が逆立つことで頬の線が現れ、その微笑みは光り輝き、眉は弧を描いている。愛しい女よ、お前のそのような得難い顔を見たならば、それ以上求めるべきものがあるだろうか？ (二)

女優 あなた、これから何を上演するつもりなの？

座長 お前自身が言ったじゃないか。『酔っ払いの戯れ』という笑劇だと。

女優 この点に関しては私の怒りが味方したようね。怒りにまかせて、思った通りに言っただけだ。あなた、それで、この作品によって知られている詩人というのは誰なのかしら？

座長 お前、お聞きなさい。パツラヴァ家という大地における中心の山であり、あらゆる政略によって近隣諸国をすべて征服し、武勇と繁栄という点ではインドラにも等しく、財産の大きさに相応しい多大な布施によってクベーラ⁽¹²⁾を圧倒する、尊敬すべきシンハヴィシュヌヴァアルマンという王がいたんだが、その息子だよ。彼は、六種類の敵の⁽¹³⁾鎮圧に専心し、他者の利益を優先することにより「五」大元素にも等しい偉大な王であり、その名を尊敬すべきマヘーンドラ・ヴィクラマヴァアルマンと言うんだ。さらにまた――

知恵、布施、憐れみ、威厳、堅固さ、美しさ、技芸の腕前、真実、勇氣、誠実、謙虚。このような美質は暗黒時代には居場所を失い、唯一の拠り所へと集まって来る。それはあたかも、劫末には様々な被造物が世界の始めである原初のプルシャへと集まって来るようなものである。(三)

さらにまた――

金言という宝石の鉱山では、美質に関して非常に重みのある善き人々の金言は、たとえ中身が軽くても高く評価される。(四)

女優　ところで、あなた、どうしてぐずぐずしているの？　新しいものなんだから、急いで上演すべきじゃないかしら。

座長　しかし、私はどうと――

歌を財産としているが、詩人の美質を語ることによって、今や地位を下げてしまった。

舞台裏に声。

愛しい女よ、デーヴァソーマーよ。

座長――

それはあたかも、若い女を連れ、^{カパーリン}鉢を財産とするこのカパーリンが、酒によって地位を下げてしまったようなものだ。(五)

両者退場、序幕終わる。

カパーリン、女を連れて登場。

カパーリン（酔った所作をして）愛しい女よ、デーヴァソーマーよ、苦行の力で思い通りに姿を変えられるというのは、本当だな。お前は最高の誓戒を規定通りに実践することで、あつと言う間に、まったく別の優れた容姿を手に入れたんだから。というのも、お前の――

顔には汗の滴が浮かび、蔓草のような眉は震えている。足取りは跳ねるようで、理由もなく笑い、声は字音が不明瞭。両目は赤みを帯び、瞳は不安定で、目の縁は物憂げ。花輪はほどけて、髪は肩の縁に掛かっている。（六）

デーヴァソーマー あなた、まるで私がすっかり酔っ払ってるみたいに言うのね。

カパーリン お前は何を言ってるんだ？

デーヴァソーマー 何も言っていないわ。

カパーリン 俺の方が酔っ払ってるだけでも？

デーヴァソーマー あなた、地面がぐるぐる回ってるわ。前のめりに倒れそう。ちよつと、私を支えてちょうだい。

カパーリン 愛しい女よ、わかった。（支えながら倒れる所作をして）愛しい女よ、ソーマデーヴァーよ、怒っているのか？ 支えようとして近づいているのに離れていくなんて。

デーヴァソーマー まあ、ソーマデーヴァーが怒っているのね。あなたが頭を下げ、敬礼して近づいているのに離れていくなんて。

カパーリン お前がソーマデーヴァーじゃないか。（考えて）いや違う、デーヴァソーマーだ。

デーヴァソーマー あなた、そんなにソーマデーヴァーが好きならば、私の名前で呼んではいけないんじゃないかしら？

カパーリン お前、これは俺の酔いのせいによくある単語と間違えたんであって、お前のせいではないよ。

デーヴァソーマー あなたじゃなくて良かったわね。

カパーリン 酒の過失といつたら、どうして俺にこんなことをさせたんだろう？ よし、今日からは酒を飲むのを控えよう。

デーヴァソーマー あなた、私のために誓戒を破って、苦行を台無しにするような真似は絶対にしないでちょうだい。
(足下にひれ伏す)

カパーリン (喜んで立たせてから、抱き締めて) ドウリルナ、ドウリルナ、シヴァに敬礼。愛しい女よ――

「酒を飲むべし、最愛の女の顔を見つめるべし。本性的に美しく、奇妙な衣を身にまとうべし。」このような解脱への道を示したかの尊いシヴァ⁽¹⁶⁾が長命でありますように。(七)

デーヴァソーマー あなた、そんな風に言って良いのかしら。ジャイナ教徒⁽¹⁷⁾たちは、解脱への道を違った風に説明しているわ。⁽¹⁸⁾

カパーリン お前、奴らは誤った見解を抱いているんだ。なぜかという――

証因にもとづいて、結果がそれ自体の原因⁽¹⁹⁾と等しいものであることを疑いなく認めながらも、苦しみの結果が楽であると考えている哀れな者たちは、その自分の言葉によって打ち負かされている。(八)

デーヴァソーマー どうか悪業が鎮まりますように。⁽²⁰⁾

カパーリン どうか悪業が鎮まりますように。本当に、この邪悪な奴らと云ったら、批判するために口にするにも値しない。奴らと云ったら、性的禁欲、抜髪、〔身体を〕汚れたままにすること、食事の時間の制限、汚れた衣を身にまとうことなどを強いて、人々を苦しめている。さて、そんなわけで、外道のことを話して汚れてしまった舌を酒で洗い流したいもんだ。

デーヴァソーマー それじゃあ、これから別の酒屋に行きましょう。

カパーリン 愛しい女よ、そうしよう。

両者、歩き回る。

おお、カーンチープラの都の壮麗なことよ。宮殿の天辺にかかった雲は太鼓の音かと疑われるような音を立てており、その花屋は春を形作る原型のようであり、美しい女たちの腰帯の鈴の音はカーマ神(21)の勝利を告げるかのようにである。さらにまた――

真実を理解した聖者の王たちが無上、無限、無比と考える楽は、残らずここに見られる。しかし、感官によって享受され、欲望の対象の享受から成るのは奇妙なことである。(九)

デーヴァソーマー あなた、カーンチーは、ヴァールニー婦人(22)のように申し分なく甘美なものね。

カパーリン 愛しい女よ、見てごらん。この酒屋は祭場の壮麗さを真似している。というのも、ここにある旗の付いた柱は祭柱であり、酒はソーマ酒、酔っ払いはリトヴィジュ祭官、酒杯はソーマ酒の盃、焼肉などの肴は様々な供物、酔っ払いの言葉は祭詞、歌は歌詠、酒器は匙、喉の渴きは祭火、酒屋の主人は祭主ってところだ。

デーヴァソーマー 私たちがここで得た施し物も、シヴァ(23)への分け前となるわ。

カパーリン ああ、酔っ払いの戯れ踊りは、見物だ。打ち鳴らされた太鼓の調子に合わせ、様々な身振り、言葉、眉の動きを伴い、高く挙げた片手には上着をぶら下げ、ずり落ちた衣を直す瞬間には拍子が不規則になり、首の紐は乱れている。

デーヴァソーマー まあ、先生って本当に粹人なのね。

カパーリン この尊いヴァールニー婦人が酒杯に注がれれば、装身具は拒絶され、怒ったふりをする恋人たちは仲直りし、青春に勇敢さをもたらし、恋の戯れに生命を吹き込む。多くを語って何になろうか――

シヴァ⁽²⁴⁾の目から出た火によって愛神カーマ⁽²⁵⁾の身体が灰にされたと人々が言うのは誤りだ。愛しい女よ、シヴァの熱力で溶けて液状になっているのであり、それが心を激しく掻き立てるので。(十)

デーヴァソーマー あなた、その通りだわ。人助けに専念している世界の主が、世界を滅ぼすなんてありえないわ。

両者、頬を叩く。

カパーリン ご婦人、施し物を下さい。

舞台裏に声。

尊い方よ、施し物はこちらです。どうぞお受け取り下さい。

カパーリン では、いただきますよう。愛しい女よ、私の鉢^{カパーラ}はどこだ？

デーヴァソーマー 私にも見当たりませんか。

カパーリン (考え込んで) あっ、さっきの酒屋に忘れてきたような気がするな。よし、戻って見てこよう。

デーヴァソーマー あなた、このように敬意をもって差し出された施し物を受け取らないのは罪なことですわ。こん

な時はどうしたらいいのかしら？

カパーリン 緊急時の生き方に照らして、牛の角で受け取ることにしよう。

デーヴァソーマー あなた、そうしましょう。(受け取る)

両者歩き回り、見渡す。

カパーリン どうしてここにも見当たらないんだろうか？(落ち込んだ所作をして) おお、シヴァ教徒たちよ、あな

た方はここで私の鉢用の鉢を見かけなかったか？「我々は見かけなかった」と仰るのか？ ああ、もう駄目だ。

私の苦行力は失われてしまった。これからはどうやってカパーリンとしてやっていけるだろうか。ああ、辛い――

あの清浄な鉢は、飲むにも食べるにも眠るにもいつも私を助けてくれた。いまそれを失ったことは、善き友を失ったことのように私を苦しめる。(十一)

(倒れて、頭を打つ所作をして) よし。鉢は徴しるしに過ぎない。私がカパーリンという名称を失ったわけではない。

(立ち上がる)

デーヴァソーマー あなた、一体、誰が鉢を持って行ったのかしら？

カパーリン 愛しい女よ、焼肉が入っていたから、犬か仏教僧だと思うんだが。

デーヴァソーマー それでは、探すためにカーンチープラ全体を回しましょう。

カパーリン 愛しい女よ、そうしよう。

両者、歩き回る。仏教僧、鉢を手にして登場。

仏教僧⁽²⁸⁾ ああ、在家信者の豪商ダナダーサ⁽²⁹⁾の布施の偉大なことよ。(他の)あらゆる家よりも多いのだからな。彼の

家では、私が望んだ色、匂い、味の、種々様々な魚や肉という、このような施食が得られた。ちよつと、これから王立僧院へ行くでしょう。(歩き回り、独白) 豪邸での居住、きちんと整えられた寢床のある寢台での睡眠、午前中の食事、午後の美味な飲み物、五種類の芳香を備えたキンマ、滑らかな衣の着用。おお、これらの教えによって最高の憐れみを備えた尊い如来は、僧団に恩恵を施している。しかし、どうして妻帯や飲酒が見られないのだろうか？ いや、一切知者がどうしてこれに気付かなかつただろうか？ 絶対に、怠惰で邪悪な仏教の長老たちがわれわれ若者に嫉妬して、聖典から妻帯や飲酒に関する規定を削除したと思うのだが。元の読みが失われていない聖典は、一体、どこで手に入るのだろうか？ それにより、仏の完全な言葉を世の中に示して、僧団の役に立ちたいものだ。(歩き回る)

デーヴァソーマー あなた、見て。信者たちが往來する大通りを、赤い衣を着た者が大急ぎで歩いて行くわ。全身を縮めて、左右を見ながら、びくびくした足取りで。

カパーリン 愛しい女よ、その通りだ。しかも、あいつの手には何か布で覆われた物があるようだ。

デーヴァソーマー あなた、それじゃあ、付いて行って、調べてみましょう。

カパーリン 愛しい女よ、そうしよう。(近付いて) おい、坊主、待て。

仏教僧 私にそのように言うのは、一体、誰ですか？ (立ち止まり、見渡して) おや、これはエーカムラに住む邪悪なカパーリカではないか。よし、この酔っ払いの相手にはならないようにしよう。(慌てて立ち去る)

カパーリン 愛しい女よ、おお、鉢を見つけたぞ。というのも、こいつが私を見て恐れ、慌てたことこそが盗みの証拠だとピンと来たんだ。(急いで近付き、前を阻む) おい、泥棒。これからどこへ行くんだ？

仏教僧 長命なるカパーリカ殿、決してそのようなことをしてはなりません。これはどういうことですか？ (傍白) おや、美しい在家女性だな。

カパーリン おい、坊主。ちよつと見せろ。お前の手にある布で覆われた物を見たいんだ。

仏教僧 この中に見るべき物がありますかね？ これは托鉢用の鉢ですよ。

カパーリン だからこそ見たいんだよ。

仏教僧 長命なる方よ、決してそのようなことをしてはなりません。これは覆ったままで持つて行かねばならないのです。

カパーリン ブツダはこのように覆うためにたくさんの布を身にまとうことを説いたに違いない。

仏教僧 その通りです。

カパーリン それは例の覆われた真実（世俗諦）⁽³¹⁾というやつだ。俺は究極的な真実（勝義諦）が聞きたいんだよ。

仏教僧 よろしい。おふざけはこれまでです。托鉢の時間が過ぎていきますので、失礼します。（歩き出す）

カパーリン おい、嘘つきめ。どこへ行くんだ？ 俺の鉢を返しやがれ。（衣の端を掴む）

仏教僧 ブツダに敬礼。

カパーリン 「カラパタに敬礼」と言うべきだろ。盗みに関する論書を書いた奴だからな。⁽³²⁾いや、この分野に関しては、ブツダの方がカラパタよりも上だ。なぜかというと――

奴は、バラモンたちが見ている前で、ウパニシャッドやマハーバーラタから中身を取って、多くの聖典を作り上げた⁽³³⁾からだ。（十二）

仏教僧 どうか、悪業が鎮まりますように。⁽³⁴⁾

カパーリン 私のように行いの正しい苦行者の悪業が、どうして鎮まらないだろうか？

デーヴァソーマー あなた、お疲れのようね。この鉢は簡単には手に入らないわ。だから、この牛の角で酒を飲んで力をつけてから、こいつと議論しなさいよ。

カパーリン そうしよう。

デーヴァソーマー、カパーリンに酒を渡す。

カパーリン (飲んで) 愛しい女よ、お前も疲れをとりなさい。

デーヴァソーマー あなた、そうしますわ。(飲む)

カパーリン こいつは私に危害を加える者だが、我々の教えでは、分かち合うことが大切だ。残りはこちらの先生に差し上げなさい。

デーヴァソーマー あなたの仰る通りにしますわ。どうぞお受け取り下さい。

仏教僧 (傍白) ああ、幸運というのは容易に得られるものだ。問題は、多くの人が目にするかもしれないということだけだ。(聞こえるように) ご婦人、決してそのようなことをしてはなりません。私には相応しくないことです。

(舌なめずりをする)

デーヴァソーマー 消えちまえ。どうしてお前にこんな幸運があるものか？

カパーリン 愛しい女よ、こいつの言葉は欲望と矛盾しているが、涎で口が滑ったんだよ。

仏教僧 今もってあなたには憐れみがありませんな。

カパーリン 憐れみがあったら、どうして欲望を離れられるんだ？

仏教僧 そのように欲望を離れた者は、怒りも離れていなければなりません。

カパーリン もし俺の物を返してくれたら、怒りを離れるんだけどな。

仏教僧 あなたの物とは何のことです？

カパーリン 鉢のことだよ。

仏教僧 どのような鉢のですか？

カパーリン 「どのような鉢のですか」などと抜かすのか？ いや、その通りかもしれないな――

お前は、大地や海、山などの目に見える大きなものでも迷妄ゆえに覆い隠している者の息子だ。どうして小さな鉢を隠すことができないだろうか？ (十三)

デーヴァソーマー あなた、ただ優しくしても返さないわ。だから、こいつの手から奪って行きましょう。

カパーリン 愛しい女よ、そうしよう。(奪おうとする)

仏教僧 消えなさい、邪悪なカパーリカよ。(手で押しつけて、足蹴にする)

カパーリン どうして俺が倒れてるんだ。

デーヴァソーマー 死んでしまえ、奴隷女の息子め。(髪を引っ張る所作をするが、掴むものがなくて倒れる)

仏教僧 (傍白) ブツダの見識は価値あるものだ。というのも、剃髪を認めたのだからな。(聞こえるように) ご婦人、

どうぞお立ち下さい。(と言って、デーヴァソーマーを立たせる)

カパーリン シヴァ教徒の方々、どうかご覧下さい。邪悪で名ばかりの比丘であるこのナーガセーナが私の最愛の女の手を握っています。⁽³⁶⁾

仏教僧 長命なる方よ、決してそのようなことを言ってはなりません。実に、不幸に陥った者に対する憐れみが私たちの教えなのです。

カパーリン これも一切知者の教えなのか？ 俺の方が先に倒れたではないか。よし、そんなことはもうよい。これ

からはお前の頭を俺の托鉢用の鉢にしてやる。

一同、取っ組み合いの所作をする。

仏教僧 なんとも苦しいことだ。⁽³⁷⁾

カパーリン シヴァ教徒の方々、どうかご覧下さい。邪悪で名ばかりの比丘であるこの男は私の托鉢用の鉢を盗んでおきながら、自分が泣き叫んでいます。よし、俺も泣き叫んでやる。バラモンに対する侮辱だ、バラモンに対する侮辱だ。

パーシユパタ、登場。

パーシユパタ サティヤソーマよ、どうして泣き叫んでいるのだ？

カパーリン おお、バブルカルパよ。邪悪で名ばかりの比丘であるナーガセーナが、私の托鉢用の鉢を盗んだのに返そうとしないんだ。

パーシユパタ (傍白) 私がやるべきことは、ガンダルヴァがすでにやってしまっている。この悪党ときたら――

私のお気に入りの床屋の女召使いを、衣の中から覗かせた小銭で何度も誘惑している。それはあたかも、餌を握った拳で牛を誘惑するかのようだ。(十四)

そこで、今は代理人を応援して敵をやっつけてやろう。(聞こえるように) おお、ナーガセーナよ、彼の言う通りなのか？

仏教僧 尊い方よ、あなたまでそのようなことを仰るのですか？ 与えられていない物を取ることを厭い離れるのは禁戒です。偽りを語ることを厭い離れるのは禁戒です。非梵行を厭い離れるのは禁戒です。生命を奪うことを厭い

離れるのは禁戒です。決められた時間以外に食事することを厭い離れるのは禁戒です。我らがブツダの教えに帰依します。

パーシユパタ サティヤソーマよ、彼らの教えはこのようなものである。これに対する答えは？

カパーリン 我々にも「偽りを語ってはならない」という教えがあるではないか？

パーシユパタ どちらも正しいな。このような場合の解決方法はどのようなものだろうか？

仏教僧 「ブツダの言葉を權威とする僧が酒器を手に取る」というこの点に関する証因はどのようなものでしょうか？

パーシユパタ 証因を論じる者たちが主張だけによって論証することは決してない。

カパーリン 知覚の対象について証因を述べることは無意味だ。

パーシユパタ どうして知覚の対象なのだ？

デーヴァソーマー 尊い方よ、こいつの手には布で覆われた鉢があるので。

パーシユパタ あなた、聞きましたか？

仏教僧 おお、尊い方よ、この鉢は他人の物ではありません。

カパーリン それならば、ちよつと見せてみる。

仏教僧 よろしい。(見せる)

カパーリン⁽³⁹⁾ シヴァ教徒の方々、どうかご覧下さい。カーパーリカが行った不正を、そしてこの尊者の行いの正しいことを。

仏教僧 与えられていない物を取ることを厭い離れるのは禁戒です。(再び同じ内容を唱える)

カパーリンと女、踊る。⁽⁴⁰⁾

仏教僧 ああ、何ということだ。恥じるべき時に踊っている。

カパーリン なんと、誰が踊っているというんだ？（あたりを見渡して）ああ、私の失くした托鉢用の鉢を見つけた
い気持ちちというマラヤ山の風に促され、喜びという蔓草が揺れたのを見て、こいつは踊っていると認識したに違
ない。

仏教僧 尊い方よ、どうしてこれが見えないのですか？ おお、仰つて下さい、この鉢の色を。

カパーリン これについて何を言えというんだ？ 見たではないか。この鉢はカラスよりも黒いわ。

仏教僧 それならば、これが私の物であると自ら認めただけですな。

カパーリン 確かに認めたわ。お前が色を変えるのが上手いことをな。見ろ――

もともとこの衣は、蓮の繊維の欠片のように白かった。⁽⁴¹⁾それがお前の不思議な技によって、夜明けの空のような
朱色になったのではないか。（十五）

さらにまた――

褪せることのない朱色で外も内も覆われたお前の手に渡ってしまったならば、一体、どうして鉢^{カパーラ}が朱色になら
ないだろうか？（十六）

デーヴァソーマー ああ、不幸な私は死んだも同然。あらゆる吉相を備え、ブラフマン⁽⁴²⁾の頭蓋骨のように輝き、見た
目は満月のようで、いつも酒の匂いのするこの鉢が、汚い布に触れてこんな状態になってしまったわ。（と言って、

泣き叫ぶ)

カパーリン 愛しい女よ、嘆かなくてよい。またきれいになるさ。というのも、優れたものは滅罪によって罪業を除くことができる。と伝えられているからな。例えば――

三日月をもって頭を飾る宝石とする我々の主シヴァは、この大誓戒を努めて保って、ブラフマンの頭部を切り落としたことで生じた罪悪から解放された。⁽⁴⁴⁾ 神々の主インドラも、かつてトヴァアシウトリの息子のトリシラスを殺したが、祭式を百回行うことによって罪悪を鎮め、再び清浄になった。⁽⁴⁷⁾ (十七)

おお、バブルカルバよ、その通りではないか？

パーシユパタ 聖典の通りの言葉だ。

仏教僧 おお、ひとまず色は私を変えたとしても、形や大きさは誰が変えたのですか？

カパーリン お前たちはマヤーの子孫から生まれた者じゃないのか？⁽⁴⁸⁾

仏教僧 どれだけ怒らせれば気がすむのですか？ 受け取りなさい。

カパーリン 実際、ブツダもこうやって布施波羅蜜を完成したわけだ。

仏教僧 こうなったら、これから私は何を抛り所にすれば良いのでしょうか？

カパーリン 仏法僧ではないのか？

パーシユパタ この争いは私では裁くことができない。そのため、法廷へ行くことにしよう。

デーヴァソーマー 尊い方よ、もしそうならば、カパーラとお別れしますわ。⁽⁴⁹⁾

パーシユパタ どういう意味だ？

デーヴァソーマー こいつときたら、望み通りに法廷の役人たちの口を満たすことができるように、たくさんの僧院を運営して手に入れた財産を溜め込んでいるわ。一方、私の方は、財産は蛇の皮と灰だけという貧しいカーパーリカのお手伝いなのだから、入廷するためのどんな財産があるでしょう？

パーシユパタ そのようなことはない――

曲がつておらず、重みで安定しており、堅固でありながら繊細であり、生まれの良い、善き人々によつて、法は支えられる。それはあたかも、柱によつて宮殿が支えられるようなものである。(十八)

カーパーリン こんなことはもうたくさんだ。正しい生き方をしている者には恐れるものなど何もない。

仏教僧 おお、尊い方よ。それでは、あなたが先頭に立つてください。

パーシユパタ そうしましょう。

一同歩き回る。狂人登場。

狂人 このクソ犬、こんなところにいやがった。焼肉の入った鉢を持って走って行きやがつて。奴隷女の息子め、どこへ行くんだ？ こいつときたら、今度は鉢を放り出して、俺に噛み付こうとして向かって来やがる。(四方を見渡して) この石でこいつの歯をへし折つてやろう。どうして鉢を捨てて逃げるんだ？ 狂ったクソ犬ときたら、こんなにも勇敢に俺にまで怒りを向けやがる。野猪の背中に乗っかって空へ飛び上がった海は、ラーヴァアナを滅ぼし、インドラ⁽⁵⁰⁾の息子である海獣を力づくで捕まえた。おお、エーランダ樹⁽⁵¹⁾よ。お前は何と言うのか？ 「まったくの嘘っぱちだ」とでも。棍棒のように幅広く、長い手を持った蛙が私の証人じゃないのか？ いや、その武勇が三界に知れ渡つた者にとつて、証人に何の用があるうか？ こうしてやろう。犬が食べ残した肉片を食つてやる。(食べ

ながら取り乱して）ああ、ああ、涙で殺されてしまうわ。（泣き叫んで、見渡して）俺を打つのは誰だ？（見渡して）クソガキどもめ、俺は誰かの甥だぞ。ビーマセーナにとつてのガトートウカチャのようにな。⁽⁵²⁾聞きやがれ――

俺の腹には、槍を持ち、多様な姿をとつた百の悪霊^{ビジャーチャ}がいるぞ。俺は口から、生まれながらに恐ろしい百頭の虎と大蛇を放つぞ。（十九）

どうして俺の邪魔をするんだ？　どうかお願いだ、若旦那。この肉片のために俺の邪魔をしないでくれ。（前方を見渡して）これは我が師シューラナンディン様。ちよつと近くへ行つてみよう。（と言って、駆け寄る）

パーシユパタ　おや、狂人がこちらに走ってくる。あいつとききたら――

使い捨てられた様々な襪を身にまとい、髪は荒れてひどく乱れている。また、大量の灰や塵で覆われ、捧げ物の残りの花輪をたくさん掛け、残飯を熱望するカラスの群れを従えている。それはあたかも、村の大量のごみが、人間の姿をしてさまよい歩いているかのようなようである。（二十）

狂人　ちよつと近くへ行つてみよう。（近付いて）尊い方よ、大変優れた、チャンダーラの犬から手に入れたこの鉢をお受け取り下さい。

パーシユパタ（視線を向けて）相応しい方に与えなさい。

狂人　偉大なバラモンよ、どうかご慈悲を。

仏教僧　ここにおられる偉大なパーシユパタがこの鉢に相応しい。

狂人（カパーリンに近付き、鉢を地面に置いて右繞し、足下にひれ伏して）偉大な方よ、どうかご慈悲を。あなたに合掌いたします。

カパーリン 俺の鉢ではないか。

デーヴァソーマー その通りだわ。

カパーリン シヴァ⁽⁵³⁾のおかげで、再び鉢^{カパーリン}を持つ者になることができた。（取ろうとする）

狂人 奴隷女の息子め、毒でも喰らえ。（鉢を奪って、立ち去る）

カパーリン（追いかけて）この死神^{チャマ}の使いときたら、俺の命を奪いやがる。二人とも手伝ってくれ。

両者 よろしい、あなたのお手伝いをしましょう。

一同、邪魔をする。

カパーリン おい、待て、待てたらら。

狂人 なんて俺の邪魔をするんだ？

カパーリン 俺の鉢を返してから行け。

狂人 馬鹿野郎、お前には見えないのか？ これは黄金の器だぞ。

カパーリン このような黄金の器を誰が作ったんだ？

狂人 尊い方よ、金色の衣を身にまとった、金細工師の義理の兄弟が作ったのです。だから、私は黄金の器だと言っているんです。

仏教僧 こいつ、狂人か？

狂人 「狂人」という言葉はよく耳にしますね。これを受け取って、私に狂人を見せて下さい。（カパーリンに鉢を渡す）

カパーリン（鉢を受け取って）あいつはもう壁で隠れてしまった。急いで追いかけてなさい。

狂人 有難うございます。

狂人、慌てて退場。

仏教僧 おお、素晴らしい。私は敵方の獲得にすっかり満足しました。

カパーリン（鉢を抱き締めて）――

俺は長い間、途切れることなく苦行を実践してきた。俺は尊いシヴァに信愛を捧げている。あの狂人は嬉しそうにして、慌てて隠れてしまったが、俺の吉祥な鉢よ、今や目の前にはお前がある。（二十一）

デーヴァソーマー あなた、月に出会った薄明時のようなあなたを目にすることで、今、私の目も喜んでいてるかのようだよ。

パーシユパタ 幸運により、あなたが繁栄されますように。

カパーリン あなたこそ繁栄されるべきではないか？

パーシユパタ（傍白）過失のない者に恐れがないというのは確かなことだ。というのも、この僧は今、虎の口から逃れることができたのだからな。（聞こえるように）友人の繁栄によって生じた喜びを胸に、これから私は東方の地に住むシヴァの礼拝の時刻を待つとしよう。そして、今日からは、この――

かつてあなた方二人の間にあった対立が、あたかもシヴァとアルジュナのように、お互いに満足をもたらす永遠のものとなりますように。（二十二）

パーシユパタ、退場。

カパーリン おお、ナーガセーナよ。私が犯した過ちに寛大な心で臨んで欲しい。

仏教僧 そのようなことを求める必要がありますでしょうか？ どうすればあなたを喜ばせることができるでしょう？

カパーリン あなたが私を許してくれるならば、それ以上のものを望むだろうか？

仏教僧 それでは、失礼します。

カパーリン お行きなさい。また会いましょう。

仏教僧 そうしましょう。(退場)

カパーリン 愛しい女よ、デーヴァソーマーよ、それでは我々も行くでしょう。

(結びの祝福)

アゲニ神⁽⁵⁹⁾が生類の永遠の繁栄のために、規定に従って捧げられた供物を〔天界へ〕運んでくれますように。バラモンたちがヴェーダを敬いますように。牝牛⁽⁶⁰⁾たちがたくさんの乳を出しますように。自らの義務に専心する者たちも、〔空に〕月や星々がある限り、災いを免れますように。力により敵を鎮めたシャトルマツラ王⁽⁶¹⁾によって世の人々が善政に与りますように。(二十三)

両者、退場。

笑劇『酔っ払いの戯れ』終わり

【参考文献】

- Barnett, L. D.
1930 *Matta-vilāsa: A Farce by Mahendravikrama—varman. Bulletin of the School of Oriental Studies, University of London.* Vol. 5, No. 4, pp. 697-717.
Bloomfield, Maurice.
1923 The Art of Stealing in Hindu Fiction. *The American Journal of Philology* Vol. 44, No. 2, pp. 97-133.
Brandis, Dietrich
1906 *Indian Trees.* Delhi: Periodical Experts Book Agency.
Kapiladevagiri
1966 *Śrīmadendranītanuavaraṇīcatīṇ Mattavilāśaprahāsanam "Prakāśa" Hindīvyākhyopetam.* Vidyabhavana Sanskrita Granthamālā 135. Varāṇasi: Caukhambā Vidyābhavana.
Keith, A. Berriedale
1924 *The Sanskrit Drama in Its Origin, Development, Theory & Practice.* London: Oxford University Press.
Lockwood, Michael & Bhat, A. Vishnu
1994 *Metatheater and Sanskrit Drama.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
Lorenzen, David N.
1972 *The Kāpālikas and Kalamukhas: Two Lost Śaivite Sects.* California: University of California Press.
2000 A Parody of the Kāpālikas in the *Mattavilāsa. Tantra in Practice.* Ed. David Gordon White. Princeton and Oxford: Princeton University Press, pp. 81-96.
Majumadara, Rāni
1988 *Mahendravikramanāmarāyāṛta Mattavilāsa-Prahasana.* Alīgadhā: Vivēka Pablikēśams.
Mani, Vettam
1975 *Purāṇic Encyclopaedia.* Delhi: Motilal Banarsidass.

Speijer, J. S.

1886 *Sanskriti Syntax*. Leiden: E. J. Brill.

Umi, N. P.

1974 *Mattavilasa Prahasana of Mahendravijayanvarman*. Trivandrum: College Book House.

岩本裕

一九五七 「サンスクリット文学における仏教(1)」、『印度学仏教学研究』第五卷第一号、二〇～二五頁。

上村勝彦

一九八四 『実利論—古代インドの帝王学(上)』、岩波文庫。

一九九二 『ニーティサーラー—古典インドの政略論』(東洋文庫 五五三)、平凡社。

二〇〇二 『原典訳マハーバータ3』、ちくま学芸文庫。

二〇〇三 『インド神話—マハーバータの神々』、ちくま学芸文庫。

小林信彦

一九六〇 「笑劇 遊女上人」、『日印文化 特集号I』、六三～七九頁。

田中於菟彌

一九九一 『酔花集—インド学論文・訳詩集』、春秋社。

辻直四郎

一九七三 『サンスクリット文学史』(岩波全書二七七)、岩波書店。

原実

一九八八 「シヴァ教諸派」、『岩波講座 東洋思想 第六卷 インド思想2』、七二～九五頁。

藤山覚一郎

二〇〇〇 『Mattavilasa と Bhaganadajukam の構成、文体、作者について』『印度学仏教学研究』第五十八卷第二号、二四〇～二四三頁。

吉水清孝

二〇一五 「クマリーラによる「宗教としての仏教」批判―法源論の見地から」(RINDAS フォーキングペーパーシリーズ二五)、龍谷大学現代インド研究センター。

(本研究は JSPS 科研費19K12953の助成を受けたものです)

註

- (1) 以下の説明は、主として *Dasarripataka* (DR, Ed. Vāsudeva Śarmaṇ. Bombay: Nirṇaya-sagar Press, 1927) , Keith 1924, pp. 182-185, 註一九七三¹、一〇六¹―一〇七頁等の説明に依る。
- (2) この形式のものから他に多く知られている作品としては、*Bhaganadajūka* があり、小林一九六〇で和訳されている。また、*Mattavilāsa* の *Bhaganadajūka* の作者問題を扱ったものとしては、藤山二〇〇〇がある。
- (3) avasthānukṛtīr nāṭyam, rūpaṇ dīśyatayocyate / rūpakāṇ tatsamarōpad, dāsādhaiva rasāśrayam // nāṭakāṇ saprakaraṇaṇ bhāṇāḥ prahasanaṇ dīmaḥ / vyāvogasaṇavakāraṇ vīḥyāṅkeḥāmṛgā itī // DR 1.7-8.
- (4) pakhaṇḍivīpraprabhṛticefivīrakulam / ceṣṭitaṇ veśabhāsābhīḥ sūddhaṇ hāsyavaconvītam / DR 3.54cd-55ab; rasas tu bhūyāsā kāryāḥ sadvīdho hāsyā eva tu // DR 3.56cd. ¹⁴ ¹⁵ *Mattavilāsa* とも関連のもの *Bhaganadajūka* にも次のような記述がある。 *atrāiva me cintā — atha tu nāṭakaprakarāṇodhavaṣu vāreḥāṇḍīmadīmasamavākārayāvogabhāṇāsāpā-vīḥyūtstīṭkākāprahasamādīṣu dāsājāṣu nāṭyaraṣeṣu hāsyam eva pradhānaṇ itī paśyāmi. tasmāt prahasanaṇ eva prayokṣyāmi/ Bhaganadajūka 7. (Melabhetter and Sanskriti Drama, Ed. Michael Lockwood and A. Vishnu Bhat. Madras: Tambaram Research Associates, 1994) 「よ、それが思案じやて。だがな、ナータカとブラカテナとを基にしてヴァーラ・イーホームリガ・ティマ・サマヴァカーラ・ヴィヤーヨーガ・バーナ・サッラーパ・ヴィーティ・ウットスリシユティカーンカ・プラハサナと芝居にや十種の趣きがある内、滑稽の趣きがわしや一番だと見るわ。それでな、出すのは笑劇(プラハサナ)としてよう。」(和訳は、小林一九六〇、六四頁による)。*
- (5) この派の文献は伝わっていないため、その教義などはその他の派の文献や文学作品などから間接的に知ることができるのである。ここに訳出した戯曲 *Mattavilāsa* もそのような文献のひとつであり、時に大げさに、そしてコミカルに描かれている可能性はあるものの、その姿を窺い知るうえで貴重な作品のひとつと考えられている。カーパリーカについては、

Lorenzen 1972等を参照。以下、本稿では、宗派名をカーパーリカ、その宗派に属する修行者をカーパーリンという呼び方で統一する。

- (6) ラクリーシャ(ナクリーシャとも)を開祖とするシヴァ教の最古の一派。原因(kāraṇa)、結果(karṇya)、ヨーガ(yoga)、儀軌(vidhi)、苦しみの終わり(duhkhanta)という五つものを説き、神(pati)により、人間(pasu)が束縛から解放されることを目的とする。シヴァ教に関しては、近年、とりわけ海外において数多くの研究成果が発表されている。日本語でパーシユパタの歴史と教義を解説したものとしては、原一九八八を参照。

- (7) カパーラを持つ者(kapalin)。

- (8) 「世界という器[を各声で満たした者]」(avanibhāna)という語は、マヘンドラ・ヴィクラマヴァルマン王の称号のひとつとされる。Barnett 1930, Introduction 参照。

- (9) Barnett 1930に於ける『Javanagunabharattavilāsa (Pkt. Jōvanagunabharattavilāsa)』が戯曲の正式なタイトルであり、その略称として『Gūṇabhara』または『Mattavilāsa』などと呼ばれる。Barnett 1930, Introduction 参照。

- (10) Barnett 1930, Lockwood et al. 1994に、itと次のnyuktaとが語を根拠にこの部分を若い妻の命令と解しているようにあるが、動詞が一人称であるため、直接語法としては合わない。

- (11) Barnett 1930に、女優ではなく、座長との関係と解し、"It certainly does concern me (確かに、それは私に関わるものである)"と訳す。

- (12) 破壊者(akhaṇḍala)。

- (13) 王の中の王(rājārāja)。

- (14) 六種類の敵にいうのは、以下の文献に記述がある。vidyāvinayahetur indriyāyāḥ kāmakrodhalobhamāmadaharsyaṅgāt kāryah// *Kautilyārthasāstra* 1.6.1. (Ed. K. P. Kangle. Bombay: University of Bombay, 1969, second ed.) 「感官の制御は学問における修養を要因とし、愛欲・怒り・貪欲・慢心・驕慢・〔過度の〕歓喜を捨てることにより得られる。(一)」「(和訳は上村一九八四、三五頁に於ける) kāmāḥ krodhas tathā lobho haṛso māno madas tathā/ sādvargan utsijed enam asmin tyakte sukhi nripah// *Kāmandakyaśāstra* 1.57. (Ed. Rajendrajala Mitra. Bibliotheca Indica No. 179. Calcutta: The Asiatic Society, 1861) 「愛欲、怒り、貪欲〔過度の〕歓喜、高慢、酔(驕慢)。この六種を捨てるべきである。それらが捨てら

- れたら、王は幸福になる。(五七) (和訳は上村一九九二、二〇頁による) *avyuktah prañitah kamakrodha-lohamadanānāharṣāḥ kṣitīsānam antaraṅgo 'rīṣadārgaḥ/ Nīlāḥkāmānta* 41. 「不適切な仕方々享受された、愛欲、怒り、貪欲、驕慢、高慢、歡喜が、王たちにとっての内的な六種類の敵である。」 (Ed. Pannalāla Soni. *Maṅgikacandradigambarajagrānthamāla* No. 22. Bambar: Maṅgikacandradigambarajainagrānthamālasamīti, Vī* Saṃ* 1979)
- (15) カーパリーカが使用した呪文の類と考えられるが、詳細は不明。Barnett 1930, p. 703, n. 2 を参照。
- (16) 弓を手に持つ者 (*pinakapāṇi*)。
- (17) Umi 1974 は仏教徒と解するが、この後のカーパリーンの台詞の内容からも、ジャイナ教徒を指すと考えられる。
- (18) 上記の「解脱への道 (*mokhamagga*)」がどのようなものを念頭に置いているのかは不明であるが、ジャイナ教で解脱への道と言った場合は、一般には正しい見解 (*saṃyagdarśana*)、正しい認識 (*saṃyagjñāna*)、正しい行い (*saṃyag-cāritra*) を合わせた三宝を指す。 *saṃyagdarśanaḥcāritraṇi mokṣamārgaḥ/ Tatvārthadhigamaśāstra* 11 (Ed. Keśavalāla Bibliotheca Indica No. 1044. Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1903)
- (19) Barnett 1930 は、*‘ātmahetorḥ* を for Soul's sake と訳すが、*‘hṛiddi* の *ātman* は *kārya* (結果) を指す再帰的な用法と考えられる。
- (20) この表現に関しは、Barnett 1930, p. 703, n. 5 を参照。以下においても数回出てくる表現であるが、日本語で言うならば「桑原桑原」「鶴亀鶴亀」といったことか。他にも、Speijer 1886, Section 2 等を参照。
- (21) 花の矢を持つ者 (*kusumāsara*)。
- (22) 文字通りの意味は、ヴァルナの娘 (*varuṇī*, 海の神) であるが、酒を指す。Barnett 1930, p. 704, n. 3 を参照。
- (23) ルトラ (*rudra*)。
- (24) 三つの目を持つ者 (*trilocana*)。
- (25) 酔わせる者 (*madana*)。
- (26) 原語の *snehāṅkika* は「液状のもの」を意味すると同時に、「愛情からなる者」を意味しており、ダブルミーニングとなっている。Barnett 1930, p. 705, n. 4
- (27) Barnett 1930 は *lakṣaṇa* の代わりに *lakṣaṇā* とし、読みの可能性も提示している。しかし、インド哲学には、*dandin* (杖

を持つ者)にとつての *daṇḍa* (杖) が定義的特質 (*lakṣaṇa*) であるという議論も見られることを考慮するならば、そのように考える必要はないであろう。

(28) ここで「仏教僧」という訳語を当てた原語は *śaḥyabhiṣṣu* であり、サンスクリット文学や碑文において、仏教の出家修行者を指す一般的な言葉とされる。(この点に関しては、岩本一九五七、二二二頁を参照。

(29) *dhanaḍasa* という名前は、「財産の奴隷」の意。

(30) 以下、底本では、プラークリットの *auśa* のサンスクリット対応語を *upāsaka* とし、*Kapiladevagiri* 1966, *Majumadara* 1988 もそれに従うが、*ayusmat* の間違いと考えられる。

(31) こゝでの原語は *śaṅyvrāśaṣṭya* となっており、*śaṅyvrā* の直訳である「覆われている」という意味と鉢が布で覆われていることを掛けた表現となっている。

(32) 盗みに関する論書(学問)に関しては、*Bloomfield* 1923, p. 97 以下、田中一九九一、二二四頁以下を参照。*Bloomfield* 1923, p. 100, n. 10 でも指摘されているように、*Mattariāśa* にも影響を与えたと考えられるパーサの戯曲のひとつである *Cāradatta* に「カハラパタ (*Kharapata*)」の言及が見られる。namaḥ kharapatāya/ namo rātriḡocarebhyo devebhyah/ *Cāradatta* p. 57 (Ed. T. Ganapati Sastri. Trivandrum Sanskrit Series No. XXXIX. Trivandrum: The Travancore Government Press, 1914)

(33) ブッダの教えがウパニシャッドなどに由来するという考え方は、他にもシーマンサー学派のクマールラの著作などにも見られる。この点に関しては、吉水二〇一五、二二六頁を参照。

(34) 注(20)を参照。

(35) 「山などのく覆い隠している者」はブッダを指す。そして、その息子というのは *buddhaputra* (仏の息子)と同様に仏教徒を指す。

(36) 手を握る (*pāṇi-grahana*) という語は、インドにおいては、単に物理的に手を握ることだけではなく、結婚も意味する。この点については、*Barnett* 1930, p. 710, n. 2 等を参照。

(37) 原語の *dukkhaṃ dukkhaṃ* は、一切を苦しみてあり、無常と考える仏教の教義を意識した表現と考えられる。*Barnett* 1930, p. 710, n. 4 を参照。

- (38) 原語の *prathastin* は、Monier Williams の *Sanskrit-English Dictionary* には “the keeper of a brothel (売春宿の主人)” を意味するとされ、参照した諸訳の中では Lorenzen 2000 (56) の解釈を採用して “pimp” と訳す。この語は、*prathasta* (代理人) の意味と解釈した。
- (39) Barnett 1930 は、これをカパーリンの台詞とするのは刊本 (あるいは写本) の間違いと考え、パーシュバタの台詞と解釈する。
- (40) 原文は、*ubhau nṛtyataḥ* (両者、踊る) とあるが、「両者」が誰を指すのかは必ずしも明確ではない。ここでは、カパーリンとデーヴァナーマリーの二人と解釈する。
- (41) *mīnābhāṅgacchavīcoram*. 直訳は「蓮の繊維の欠片の色を盗んでいた」。
- (42) 蓮華を座とする者 (*kamālāsana*) 。
- (43) 「父方の」祖父 (*pitamaha*) 。
- (44) このエピソードは、*Sivamahāpurāṇa* 第三章 (*Satarudrasaṁhita*) 第三節 (*Bhairavāvataraḥāvarṇana*) に見られる。その要約としては、Mami 1975, Bhairava II の項目 (3) *Brahmahatya* を参照。
- (45) 天界に住む者たち (*tridivaukas*) 。
- (46) 「二つの頭を持つ者」の意。
- (47) かつて、工巧神のトヴァシュトリは、インドラを害するために三つの顔を持つヴィシュヴァルーパー (トリシリラス) という名の息子を作った。彼が激しい苦行を行い、三界を呑みこむのではないかと恐れたインドラは、ヴァジュラを投げた。しかし、ヴィシュヴァルーパーは地に倒れたものの輝かしい光を放ち、生きているかのように見えたので、樵に命じて斧で三つの頭を切り落とさせ、その後、その後に浄めのための難行の務めを行ったという。このエピソードに関しては、上村二〇〇三、一四頁以下を参照。
- (48) ブツダを指す。マヤーがブツダの母親の名前であるのと同時に、「幻術」「まやかし」等も意味することにもとづく表現。
- (49) Barnett 1930 の解釈に従う。直訳は「カパーラに敬礼します (*namah kapālaya*)」。
- (50) シャクラ (*sakra*) 。
- (51) トウゴマ、ヒマ。アフリカ原産の植物で、学名は *Ricinus communis*. Brandis 1906, p. 593 を参照。

(52) 実際には、ガトートウカチャはビーマセーナの甥ではなく息子である。Barnett 1930, p. 714, n. 4; Mani 1975, pp. 290-291 等を参照。

(53) 尊い方 (bhagavat)。

(54) 偉大な自在神 (mahesvara)。

(55) 身体に灰を塗ったカパーリンを薄明時に、鉢を月に喩えている。Barnett 1930, p. 716, n. 2; Lockwood et al. 1994, n. 48 等を参照。

(56) 尊い方 (bhagavat)。

(57) 山岳民 (kirata)。

(58) *Mahabharata* の *Aranyakaparva* 第一六三章に見られるエピソード。アルジュナがヒマラーヤ山中において苦行を行っていたところ、猪の姿をした怪物が通りかかり、その獲物をめぐって山岳民^{キリタ}と争いになる。アルジュナは山岳民を倒すために多くの矢を浴びせ、その他にも様々な武器を用いて攻撃したが倒すことができず、最後には素手で戦って打ち倒されてしまう。その後、この山岳民が実はシヴァ神だったことが明らかになり、アルジュナの勇敢さに満足したシヴァ神は、パーシユパタという武器を授けた。該当箇所の和訳は、上村二〇〇二、四六九頁以下を参照。このテーマは、後にバーラヴィ (Bharavi) の作品 *Kirtarjunīya* でも取り上げられた。

(59) 報酬を与える者 (jāaveda)。

(60) スラビの娘 (surabhidhrit)。

(61) 「敵に立ち向かう強者」の意で、マヘーンドラ・ヴィクラマヴァアルマン王の称号のひとつとされる。Barnett 1930, Introduction 参照。